

〈論 文〉

ジャーナリストのアイデンティティと立場性

——沖縄2紙で働く本土出身記者の聞き取りから——

畑 仲 哲 雄

はじめに

沖縄の新聞社に記者として就職した約20人の本土出身者を対象に聞き取り調査をおこなった。調査対象を、沖縄県内出身者ではなく、県外出身者とした理由については、ここではさしあたり「よそ者としての属性に着目したから」と記しておく。同時に、本稿の筆者も本土で生まれ育ち、沖縄と特別な関係があったわけではないことも記しておきたい。

さて、ジャーナリズムに関する議論は、近代市民革命を遂げた欧米を中心に数百年にわたって積み重ねられてきた。なかでも倫理規範は、「表現の自由」や「知る権利」など諸個人の権利にもとづいて権力を監視する役割や、社会的責任をめぐる批判から市民社会との良き関係が模索されてきた。だが、これまで議論が少なかったように思われるのが、倫理や規範と取材者の属性や立場性との関係である。

ジャーナリストとは、国籍や民族、宗教などの別なく、共通の理念や価値を共有できる普遍性を持つ職業なのだろうか。たとえばサイドが批判したとおり、欧米のメディアが描いた「イスラム」は、はからずもイスラム世界に暮らす人々にとって暴力であった⁽¹⁾。イスラムへの憎悪や恐怖をかき立てた報道は意図的になされたのか、それとも無意識のうちになされたのだろうか。ニュースの送り手がどのような属性をもち、どのような人たちに向けて報道しているのかによって、メディアが描く「世界」が異なって映るとすれば、そうした問題は、報道倫理のなかでどのように位置づけられるのだろうか。

こうした問いを解くための第一歩として、本稿では沖縄における本土出身記者たちが、自らの属性や立ち位置をどのように意識し、どう折り合いを付けているかを聞き取り、取材者のアイデンティティや立場性を検討する。

1. 「沖縄ジャーナリズム」の発見

1.1. ジャーナリズム研究における「地域」

戦後日本のジャーナリズム研究を振り返ったとき、「地域」に着目した研究は多いとは言えない。日本新聞学会⁽²⁾は1969年、『新聞学評論』に「戦後ジャーナリズム年表」を15頁にわたって掲載したが、特定の地域に焦点を当てた研究や論考の類いは見当たらない⁽³⁾。

もっとも、日本各地には地域のメディアがあり、その土地々々の課題や問題を地元住民に向けて報道している。日本新聞学会は1958年春季シンポジウム「地方文化とマス・メディア」などを催してきたし、実務者の団体である日本新聞協会も1956年に『新聞研究』で連載した特集記事を『地方別日本新聞史』として書籍化した⁽⁴⁾。だが、それらは「地方」を中央政府に従属するものとして捉えがちであったように思われる。

上記のような枠組みではなく、「地域」のメディアやジャーナリズムを積極的に評価した研究としては、田村紀雄『日本のローカル新聞』（1968）が挙げられよう。田村は各地に根を張るローカルなメディアの自律性や多様性に光を当て、全国メディアを相対化した。時をほぼ同じくして、奥田道大は静岡県三島・沼津地方で起こった石油コンビナート進出反対運動を調査する過程で「県内紙ではなく、タブロイド版の地域小新聞（俗に豆新

聞)に、情報提供の真価が発揮された」(奥田 1968: 125)と、ジャーナリズム研究では周縁化されがちだった地域紙⁽⁵⁾の役割を評価した。

ただし1960年代は安保闘争や日韓条約、ベトナム戦争などナショナルなレベルの政治課題が新聞紙面をたびたび覆っていた。70年代初頭にはアメリカの主流紙による調査報道⁽⁶⁾や、西山事件⁽⁷⁾などの影響もあって、全国紙や地方紙に比べると地域紙には光が当たりにくかった。

1.2. 沖縄のジャーナリズム

沖縄は戦後27年間にわたりアメリカの施政権下に置かれ、本土に移住した沖縄出身者は関西や関東の都市に集住することが多かった。本土復帰(沖縄返還)前の沖縄と本土との往来にはパスポートが必要で、相互の情報も伝わりにくく、本土では沖縄に対する関心や理解は総じて低かったといえる。

本土メディアが意図的に沖縄を無視したわけではない。門奈直樹(1996)によると、『朝日新聞』は1955年に沖縄に関するキャンペーン報道をおこなっている⁽⁸⁾。この報道により、戦後10年目にして沖縄の実情が本格的に本土に伝えられた。それをジャーナリズムによる「沖縄の発見」とすれば、研究者たちは1960年代に「沖縄ジャーナリズム」を発見したといえる。

後に県知事となる大田昌秀⁽⁹⁾は1964年、『新聞研究』に「明治時代の沖縄の新聞」と題する連載を寄せ、65年には『新聞学評論』に「沖縄最初の新聞『琉球新報』—その創刊の頃を中心に」を投稿した。66年には『沖縄の言論—新聞と放送』(辻村明⁽¹⁰⁾と共著)を出版するなど沖縄メディアのあゆみを検討した。

60年代後半からは、門奈直樹が本土から沖縄のジャーナリズムを対象化した。門奈は70年に『沖縄言論統制史』を出版した⁽¹¹⁾。71年には日本新聞学会で「復帰直前の沖縄ジャーナリズム—その動向と今後の課題」を発表し、本土復帰の72年に論文「戦後沖縄ジャーナリズムの形成過程—民衆言論成立の一系譜として」を著した。「沖縄」という地域のメディアは大田によって言挙げされ、門奈によって「沖縄ジャーナリズム」と命名

されたといえるだろう。

1.3. ジャーナリストのアイデンティティ

本土では、沖縄返還が国民的課題となるや、沖縄への関心が高まり、本土のジャーナリストは沖縄のジャーナリストとの連帯を模索した。だが、県民の4人に1人が犠牲になったといわれる沖縄戦の記憶と四半世紀以上にわたるアメリカ軍の支配を受けてきた沖縄の記者たちと、高度経済成長の恩恵を受けていた本土の記者たちとの間には、容易に越えがたい溝や壁があった。

1969年9月、日本新聞労働組合連合(新聞労連)が初めて沖縄で新聞研究集会を開き、本土から58人の記者が那覇を訪れた。2ヶ月後に湯河原で開く本集会を前にした分科会で、テーマは「安保と沖縄」であった。翌年70年に出版された報告⁽¹²⁾から、このとき沖縄の記者たちが本土の記者に対して苛立ちを覚えていたことが読み取れる。

集会では、当時沖縄タイムス嘉手納支局長だった玉城真幸が「基地のど真ん中での取材活動」と題する報告をおこなった。昼夜の別なく住民の頭上を飛ぶ米軍機の爆音や、核が貯蔵されている疑いのある施設の恐怖、米兵から銃を向けられることも珍しくない日常の取材活動を述べた玉城は、「沖縄の記者にとって基地とのたたかいなくして報道はありえない」と報告を締めくくった(玉城 1970: 58)。

討論の記録によれば、何人もの本土の記者たちが玉城報告に「ショックを受けた」と語り、沖縄と本土の圧倒的な差を見せつけられ当惑しているようすが見て取れる(新聞労連 1970: 107-109)。逆に、沖縄の記者たちは、本土の記者たちが沖縄への認識や理解の薄さに苛立っている表現がいくつも見られる。(前掲書: 120)。

玉城報告から約半世紀を経た2017年、『マス・コミュニケーション研究』⁽¹³⁾が「沖縄とメディア」を特集した。寄稿者の具志堅勝也(元琉球朝日放送)も宮城修(琉球新報社)も沖縄戦以降の歴史的な経緯を踏まえ、基地問題と向き合う沖縄メディアの使命を語り、本土メディアの沖縄への理解と関心の薄さを批判している。それらは玉城

報告の繰り返しのようと思われる。

先述の門奈直樹は、「沖縄ジャーナリズム」を、民衆の抵抗に寄り添う点に特徴があり、そうした実践理念は一つの地域にとどまるのではなく、国境を越える広がりをもつと強調した。筆者は門奈の議論に全面的に賛同する。だが、門奈がいう「沖縄ジャーナリズム」は、沖縄の人（ウチナーンチュ）によって担われることが暗黙のうちに了解されていないだろうか。

だが、1990年代ごろから、沖縄の新聞社には本土出身者が記者職で就職する例が増えている。ウチナーンチュとしてのアイデンティティを持っていない人たちが、どのようにして「沖縄ジャーナリズム」を担いえるのであろうか。

2. 調査の概要

2.1. 調査方法

筆者は2017年春から夏にかけて琉球新報社と沖縄タイムス社に「県外出身の記者」の聞き取り調査を依頼した。両社の協力を得て、同年8月

28日から9月14日までの間に、2社あわせて計19人の沖縄県外出身の現役記者に会うことができた。

聞き取りは、必ず1対1でおこなった。1人あたりの面談時間は1時間前後、長いケースでは2時間近くを要した。聞き取りは半構造化形式で、1) これまでに担当してきた持ち場や取材内容、2) 沖縄の新聞社を就職先に決めた理由、3) 本土出身者であることに伴う具体的なエピソード、4) 県外出身の記者としての役割——などを共通の質問項目と設定した⁽¹⁴⁾。

2.2. 被調査者

被調査者の性別は女性8人、男性11人で、調査時点の年代では20代が1人、30代7人、40代9人、50代2人であった。出身地別にみると、関東地方7人、中部地方5人⁽¹⁵⁾、関西地方6人、九州地方1人であった。

2社にはこの19人のほかにも県外出身の記者がいる。2社から紹介された人はほかにもいた

表1 被調査者一覧

	年齢	性別	沖縄の記者になった契機や背景	調査日
A	40代	男性	少女暴行事件に対する県民の抗議に衝撃を受けた	2017/08/30
B	30代	男性	就活で沖縄の新聞を知り、図書館に通って読んだ	2017/08/31
C	40代	男性	大学の部活で長期滞在した沖縄が好きになった	2017/08/31
D	50代	男性	寒冷地が嫌で、沖縄しかないと考えた	2017/08/31
E	50代	男性	沖縄の大学で社会運動に関わる教員に感化された	2017/09/01
F	40代	女性	海外での体験から国際報道するなら沖縄と決めた	2017/09/01
G	30代	女性	親が沖縄出身。沖縄を旅行中に求人広告を見た	2017/09/02
H	40代	男性	米軍基地や人権問題に向き合いたいと思った	2017/09/02
I	40代	男性	文学作品で沖縄の実情を知り、無知を恥じた	2017/09/03
J	40代	女性	就活に出遅れ、募集していた会社に応募しただけ	2017/09/03
K	40代	女性	沖縄料理店でバイトをして沖縄の新聞を読んでいた	2017/09/03
L	40代	男性	震災で記者職に興味。最果ての島にアコがれた	2017/09/03
M	30代	女性	学生時代に幾度も長期滞在して“沖縄病”になった	2017/09/06
N	30代	女性	沖縄の新聞社でインターンした縁から	2017/09/06
O	30代	男性	沖縄の大学に進み、地元記者から助言をもらった	2017/09/07
P	40代	女性	本土の大学で沖縄関係のサークルに所属していた	2017/09/08
Q	20代	男性	沖縄の大学で安保や基地問題に関心を抱いた	2017/09/11
R	30代	女性	沖縄戦に詳しい全国紙記者との出会いから	2017/09/11
S	30代	男性	沖縄の大学を出て沖縄で就職し、中途採用	2017/09/12

が、時間的な制約から全員に会うことはできなかった。

実名表記をいとわない被調査者もいたが、本稿では匿名で統一した。表1に記した「沖縄の記者になった契機や背景」は、筆者による要約で被調査者の発言ではない。

2.3. カテゴリー問題

注意しておきたいのは、「県外出身者」というカテゴリーの妥当性である。たとえば、本人は本土で生まれ育ったけれど、親が沖縄出身で家庭でも沖縄文化になじんでいた人もいれば、逆に、沖縄で生まれ育ったけれど、親が本土出身で沖縄に地縁血縁がないため、家庭内が沖縄らしくない人もいる。このため、出生地で機械的に県内／県外を切り分けるのではなく、本調査では、本人も「県外出身」という意識をもち周囲からもそのように認識されている人を「県外出身者」としてカテゴリー化した。

沖縄本島では、沖縄の人をウチナーンチュと呼ぶ。その言葉には琉球王朝の昔から受け継がれてきたエスニシティが含意され、文脈によってはヤマトンチュ（日本本土の人）やナイチャー（内地の人）⁽¹⁶⁾に対する猜疑心が意識される場合もある⁽¹⁷⁾。このため、今回の調査では両新聞社に「ヤマトンチュ」や「ナイチャー」ではなく、「県外出身」という表現で記者を紹介してもらうことにした。

3. 持ち場とキャリア

沖縄2紙では、本社編集局に社会部、運動部、文化部、写真部などのほか、基地問題を担当する政経部／政治部・経済部がある。本島では本社以外の取材拠点として、中部（沖縄市）や北部（名護市）があり、基地取材の現場となっている。両社とも定期的な人事異動により、数年ごとに記者の担当や持ち場が変わる。

本調査で共通に質問した「担当してきた持ち場や取材内容」では、どの被調査者も、県内出身の記者と区別されることなく遇され、能力や適正に応じた取材活動に従事していることが確認された。昇格・昇進の面でも、県外／県内の区別は見

られなかった。

むしろ、県外出身の記者がワシントン特派員や基地取材の中心的な役割をはたすことが珍しくなかった。琉球新報社では、沖縄の本土復帰前からジャーナリストの森口豁⁽¹⁸⁾や野里洋⁽¹⁹⁾が記者として働いているし、沖縄タイムス社でも県外出身の記者が基地問題に関する単行本を出版して話題を呼んでいる⁽²⁰⁾。

4. 志望動機とその背景

共通質問のうち、「沖縄の新聞社を就職先に決めた理由」について本稿で、類型を試みた。ひとつの類型は、いろんな意味で沖縄に魅せられ夢になった、いわゆる“沖縄病”といえる人たちである。もうひとつは社会問題への関心が高じて沖縄に根を下ろした人たち。もうひとつ挙げておくべきは、みずからの無知を恥じる気持ちや罪悪感に動かされた人たちである。上記のどれにも当てはまらない人もいたが割愛する。

4.1. “沖縄病”

Mは大学が休みになるごとに那覇のゲストハウスに滞在し、夜な夜な飲み歩いてたと話した。もともと雑誌ジャーナリズムに関心があり、出版社の編集部でアルバイトもしていた。那覇訪問時には、一般的な観光旅行者に知られていないような、街のディープな部分に魅せられたと語った。

——ハマった？

M：そうですね。夜、飲み歩いたりが好きだった、とか。

——なぜ沖縄なんだろうね。いわゆる沖縄病？

M：それもあるのかもしれないけど、……言葉で言ったらそうなるのかもしれないですけど、昼間はずっと寝てて、夜、飲みに行ったり、バイトしたり。

那覇で遊ぶための資金は、那覇のキャバクラでアルバイトをして稼いだりした。沖縄で付き合い合った男性から「ナイチャーだから」と突き放されたことが幾度もあった。それが心に引っかかったMは、「ナイチャーに対する沖縄人の意識」を卒業論文テーマに決めた。本土の一人暮らしの下宿

で、2日遅れの『琉球新報』を定期購読し始めた。那覇で知己を得た写真家から、琉球新報社に本土出身の記者がいると教えられ、その人に会いに行ったりもした。

Mは沖縄の新聞社の入社試験は複数回不合格になったが、あきらめきれず、沖縄の大学院に進学し、沖縄で就職してからも「意地になって」新聞社を受け続け、入社を許された。

Oは高校2年の修学旅行で初めて訪れた沖縄に圧倒され、「ここに住みたい」と思った。翌年の夏休みに1人で沖縄を旅行し、ますます沖縄が好きになり、沖縄の大学への進学を決意した。Oが通っていた高校では大学進学者は少なく、Oも勉強が苦手であったというが、沖縄の私立大学に合格できた。

——なにが沖縄の、どこが好きになったんですか。一種のエキゾチズムですか？

O：それもありますね。あとはやっぱり、戦争もあるし、文化もあるし。これまで17年間一度も触れたことがなかった世界に、すごく衝撃を受けたんですよ。[……] 一番印象に残ったのは、空港出たときの肌感覚と、那覇のホテルで夜に聞いた、ひめゆり学徒の、あの戦争体験の話っていう、2つの、まぶしい太陽と悲惨な話のコントラストがすごく激しくて。で、まあ、沖縄に住んでみたい、と。

もともと記者の仕事に関心があったOは、沖縄の新聞社を受験したが不合格となり、希望する新聞社で校閲のアルバイトをしながら入社試験を受け続けた。このやり方は、大学4年のときゲスト講師として大学にやってきた本土出身の記者から教えてもらった。

結果的にOは、5回目の試験で合格した。このときOには沖縄にフィアンセがいて、入社試験の面接でも「沖縄の女性と結婚して、この地に骨を埋める覚悟です。本土に逃げ帰ったりしません」と大見得を切ったという。

4.2. 社会問題への関心

Fは高校生のころから国際問題に興味があり、将来は国連で働きたいと思っていた。転機のひと

つは、高校生のときに自分を受け入れてくれたアメリカのホームステイ先を、大学入学後に再訪したときの出来事である。

F：アメリカのホームステイ先の親戚の人で沖縄の海兵隊員がいたんですよね。彼らとも話す機会があって、その時、沖縄って日本じゃないんだな、と。海兵隊員の話だと「沖縄にいると犯罪起こしても捕まんないんだよね」みたいな。

——じっさいに沖縄経験者がそんな話をしていたんですか？

F：そう。現役でいました。沖縄からホームタウンに休みで帰ってきたりしてた人がいて。[……] それがちよっと記憶にあったんですよね。それで、進路を決めるときに、記者になろうと思ったんですけど、どこでじゃあ記者をするか、と。もちろん全国紙で安全保障とかやれたらなあと思っていたんですけど、そういう話をマスコミ研究会でOBの人に相談したら、「だったら沖縄の新聞にしたら」って言われて。

Fは東京のテレビ局で国際報道に従事したいなと考えていたが、キー局でも報道部門で取材記者を続けるのは難しいことをOBから教えられ、安全保障や国際問題の「現場」に立ち続けるには、日本では沖縄が最適だと考えた。国際問題への関心や職業意識からFは沖縄という場を選んだ。

Eも社会問題への興味関心から沖縄の新聞社で働くことを決めた。ただし、Fとは対照的にEは下町の典型的なブルーカラーの環境で生育したという。先述のOと同じく、進学校ではない高校に通っており、高卒で就職するつもりだった。

転機は、沖縄の私大の入学案内を高校で教えられたことである。当時その大学は、東京で受験でき、入試は面接と小論文だけあった。面白そうだ、と思って受けたら合格した。入学した大学は、社会問題に関わっていた教員が大勢いた。そこでEは感化されたという。

Eはキャンパスの外で多くを学んだ。新石垣空港建設などの環境問題に触れ、ピースボートにも乗船した。東京の学生たちとの合同ゼミなどを通じて、Eは沖縄の大学で「生きざまを変えてもら

った」と話す。

印象に残っているのは、大学3年生の時、ゼミ教員が開催したジャーナリズム講座である。そこには著名なジャーナリストたちが講師としてやってきた。

E:……漠然とその、報道っていうのが、わたしのなかでは否定的なイメージが強くて。つまり「人が一生懸命汗流していることに対して、ケチつけてるだけの、卑しい仕事じゃねえか」と思ってたんですね。「他人の批判ばかりして、てめえはどうなんだ」というふうに思っていたんですが、このジャーナリズム講座を受けて、他人の批判をするには、その人のかいてる汗よりもっと汗をかかないと批判できないということがわかって、けっこう厳しい仕事なんだな、というのが分かったんですね。これは結構面白いなと思って。

Eは沖縄の新聞社への初受験では失敗したが、1年沖縄にとどまり、社説を精読して翌年再受験して入社した。

4.3. 無知・無関心の反省

Iは高校を卒業した春に、沖縄発のニュースに当惑した。読谷高校⁽²¹⁾の卒業式で1人の女子生徒が「日の丸」を奪ってドブに捨てた。Iには、同年代の若者の行動がまったく理解できなかった。予備校生だった秋に、今度は海邦国体の会場で、男性が日の丸を引き降ろしてライターで焼くニュースに接し、Iは「沖縄やべえー」という印象を強くしたという。

翌春、関東地方の私大に合格したIは、入学式を待つまでの暇な時期に、親戚の人から数冊の本をもらった。その中に灰谷健次郎の『太陽の子』があった。

I:それを讀んだときに、(深い呼吸)ほんとうに衝撃を受けたんですね、もう、いまでも思い出すくらいですね。

——はあ。

I:すっごく感動したのと、もうひとつは、とっても恥ずかしかった。

——恥ずかしかった？

I:うん。つまり、こんな歴史があったんだってことを、ぼくは全く知らないわけですよ。[……]あの本の中に書かれている沖縄戦の話と、読谷高校の高校生、沖縄の人たちに対する日の丸っていうのが、バッシンとつながってくるんですね。そのとき、つくづく思ったのは、知らないって怖いんだ、ってことを、あんどき、ほんとに骨の髄まで、19歳でしたけど、知ったって感じだったんですね。

——なるほど。

I:ぼくは、あの本1冊で沖縄に来たみたいなのところがあったですね……

Iと同じく、沖縄に対し、自分がいかに無知で鈍感であったかを恥じ、悔い、半ば贖罪意識に駆られて沖縄の新聞社の門を叩く本土の若者もいる。Iは沖縄の新聞社の受験に失敗したあとも新聞社に掛け合って校閲のアルバイトの仕事をもらい、受験し続けて入社をはたした。先述のOに校閲のアルバイトをしながら受験するという手法を伝えたのはIであった。

5. “ヤマト記者”としてのエピソード

沖縄の新聞社に就職した県外出身者は、事実上のエスニック・マイノリティとしての属性や立場性を意識する。日本の国籍を共有していても、「ウチナーンチュ」と「ヤマトンチュ」は異なる歴史を歩んできた。「ウチナーンチュの心とは、ヤマトンチュになりたくてもなりきれない心」とは、元知事・西銘順治が残した有名な言葉である⁽²²⁾。県外出身の記者たちは、この問題とどう折り合いをつけたのか。あるいは、つけようとしているのであろうか。

以下、象徴的と思われる事例を検討してみたい。

5.1. 容貌と苗字

沖縄諸島住民に特徴的な容貌というものがある。一眼レフカメラを手にしてタクシーに乗り込むと、ミラー越しにタクシー運転手から「お客さん、どこから?」「いつまでいるの?」などと尋ねられることは、どの観光地でもあることだが、沖縄ではそれが顕著である。新聞記者も流しのタクシーをよく利用するが、「何しに来たの?」と

問われるのは、顔立ちがウチナーンチュらしくない本土出身の記者たちである。「ウチナーンチュではない」と即断する人は、タクシー運転手だけではない。

——これまでの記者生活を振り返っていただいて、ウチナー、ナイチャー問題で、ズキンと胸に刺さったご経験は？

J：一番しんどかったのは、やっぱり来てすぐですね。[……] タクシーで移動するじゃないですか。乗るたびに「あんた、どこから来たの」「何しに来たの」「いつまでいるの」っていうのを [……] 1日に10回くらい乗るじゃないですか。そのたびに聞かれるのが、ほんと「いい加減してくれ」と思ったのが、一番しんどかったです。

容貌の次にわかりやすい目印が苗字である。取材先で名刺を差し出した瞬間のことを挙げた被調査者は多い。日本政府や本土の人間に対する怒りを、ぶつけられた記者もいる。

R：名刺出して「ナイチャーね」「ウチナーンチュじゃないね」って、話してくれない人もいますし。で、なんか、基地問題で、辺野古のゲート前で話を聞こうと思ったときに、自分が県外出身だから……だから、「あんたヤマトねー。ヤマトの人に話すことなんかないよ」って。もう、「沖縄がこれだけ我慢してるのに、あんたらの責任でしょ」みたいな。話してくれないことも、あるので……

——どうするん、そんなとき。

R：何とも言えない気持ちをこっちも抱えてるので……。

——そんな言われてもなあ。

R：なんか、経済部のときも、企業の社長のところにインタビューに行った時に、なんか、「ヤマトから来たんですねって」言って、「あなたみたいな人が内地から沖縄に入ってくるから沖縄の人が仕事なくなるんですよ。罪の意識ありますか」って言われたんですよ。

程度や頻度に差はあるが、同じような経験をしている本土出身記者は多い。滞在年数が浅い記者たちには特に胸に刺さるようである。

5.2. 経験の封印

本土出身の記者の中には、事前に沖縄について勉強していることが多い。本土にいるときから沖縄の新聞を定期購読したり、沖縄戦や基地問題に関する本を読んだり、あるいは島唄やエイサーなどの沖縄文化に親しんだりしている人もいる。本土では「沖縄通」で通っていた学生たちは、沖縄で記者生活を始めたとき、そうした経験を封印していた。

Nは大学2年のとき、沖縄出身者が集住する関東のある街でウチナーグチ（沖縄方言）の勉強会に通っていた。ネイティブのようにはいかないが、首里・那覇出身の高齢者と会話できるレベルになっていたという。

——すごいな。

N：でも今はもう、ぜんぶ抜けちゃいましたけど。

——え、そうなんですか？

N：けっこう抜けてしまっています。

——え、なんですか。抜ける理由がわからない。いたところで使われているでしょ。

N：そうですね、やっぱり取材ってなったら、名刺出した瞬間に「沖縄の人じゃないよね」って。顔もそうじゃないですし、あの、ウチナーグチで話してくれるわけじゃなくて、パッと切り替わるんですよ、言語が。

——あー、地元の人が気を使ってくれているんですか。

N：そうです、そうです。それは感じます。[……] やっぱ、あの、わたしが、ウチナーグチを話すのは、たぶん変だと思うんですよ。いかにも「勉強してきましたよ」、「知ってますよ」っていう、アピールにしかない。

Hは、ジャーナリストとして仕事をするなら、沖縄以外には考えられない、と早くから決めていた。沖縄のニュースが本土でも大きく報道されるようになり、基地問題など人権問題が凝縮された地域の存在に強い興味を覚えた。だがHは、沖縄に来てまもなく、地元の人と話をするとき、もともと関心があった基地や人権の話題を封印した。

——受けいられるのが先決だと。

H：そうですね。まず溶け込んで、沖縄のことをよく知って……。軽々しく基地問題について発言するのをやめようと思ったんですよ。

——ふーん。

H：最初のころに、ふつうの、運転手さんとかに、「お前なに言ってるんだ」みたいなことを言われたんですよ。「沖縄のこと何も知らんのに」みたいなこと言われて。自分の中で……ほんとにその通りだし、何も知らない（本土出身の）記者が基地問題をどうのこうの言うのって、おこがましいな、って。[……]とにかくそんな偉そうなことを言うの、やめようと思って。しばらく何年とも言わなかったんですよ。

Hの封印の理由も先述のNと同じで、端的に言えば、自分がウチナアンチュの目にどう映っているかを意識した結果といえる。いわゆる「沖縄のころ」を宿しているかどうか分からない新参者が、本土で付け焼き刃のように身につけた知識や技能を用いることが、なぜ倫理的な問題を生むのかについては、稿をあらためて検討する必要がある。

5.3. 線引き

「沖縄のころ」とされるものは本土出身の記者に宿るであろうか。すなわち沖縄に根を下ろし、沖縄で子育てをし、沖縄のために力を尽くし、沖縄に骨を埋めるつもりで本土出身の記者は「沖縄の人」として認められるだろうか。あるいはどこまでいっても「ガラスの天井」ならぬ「ガラスの壁」の外側に置かれるのだろうか。

Kへの聞き取りでは、沖縄独立論⁽²³⁾をめぐる議論について意見を聞く機会があった。もし沖縄が独立したら、本土出身者はどのような扱いになるのだろうか。Kは血脈やイデオロギーではなく、その人の行動で判断してもらいたいと語る。

——（ウチナアンチュではないけれど）アイデンティティとしては、沖縄県民。行動が大切という立場ですね。

K：そう。その人が何をしているか。ゲート前にいるおばあちゃんたちが「ナイチャーでもなんでも、基地に反対してくれて、一緒に闘ってくれたら、ナイ

チャーでも何でもいい」と。いま「プロ市民」とか言われてますけど。そうですね、アイデンティティよりも、自分は行動か。思想と言うよりも行動のほうが。何してるか、かな。

——（もし沖縄が独立して）国民を再定義したらナイチャーは外人になる？

K：血の定義になってくるので。母方が沖縄とか、アイデンティティの問題なので……。ナイチャーと呼ばないで、とかいうのはなく、「ナイチャーでどうぞ」。ナイチャーと呼ばれても、気にはしないし。

——……

K：昔ね、言葉がわるい先輩とかいいっぱいいて。でも愛情もって「腐れナイチャーが！」とか言ってくれたんで（笑）[……]その人が宮古出身だったんで、宮古出身って、本島との間に色々あるじゃないですか。「腐れナイチャー」に、「なんすか、ミャーコ！」（笑）とかいうのは、しました（笑）。

沖縄社会でマジョリティが口にすれば「差別」と指弾されるかもしれない言葉で、少数者同士がジャレ合う光景は、独特の雰囲気をかもししていたようにも思われる。だが、すくなくともKにとって、宮古島出身の先輩記者が放った「腐れナイチャー」という言葉は、職場の緊張の糸を解きほぐす解放的な「笑い」として作用していたことがうかがえる。

Lからの聞き取りからも、少数者としての強い意識がうかがえた。Lはアイデンティティを問われたとき、方便として「ナイチャー辞めました」と笑って答えると話した。

L：「出身はどこですか」と聞かれたら、「〇〇県です」と答えるんですが、「ウチナアンチュですか」と聞かれたら「ウチナアンチュです」と答えるんです。「ナイチャーですか」と聞かれたら、「昔はナイチャーでした」って答え方をしてまして（笑）。

——（笑）

L：ナイチャーって、やめられないかなって思ってますね。「もう僕は〇〇年沖縄にいますから、ナイチャーは辞めました」と。でも出身はどこですか、と聞かれたら、もうコレは隠せないというか、出身だから変えられないじゃないですか。[……]「ウチナアンチュです。元ナイチャーです」と（笑）。ブラジル

に生まれて、ウチナーンチュという人がいて、彼がウチナーンチュだと思うなら、まあ、そうかな、と思うし。

聞き取りの最後にLは、3歳の娘が自分のことを「(自分は) ナイチャーじゃないよ」と話したのを聞いたことがあると話した。3歳にして「ナイチャー」という言葉で差別されているのかどうかは分からないが、Lが笑いを一種の武器にしている背景事実として記しておきたい。

6. 県外出身記者の役割

沖縄の新聞社ではウチナーンチュというアイデンティティを強くもつ記者が多数を占めているが、県外出身の記者も増えている。県外出身記者の役割とは何だろうかと問いかけたが、類型化できるような答えは得られなかった。

6.1. 県民としての責任

もっとも多かったのは、どこで生まれ育ったか、どの人から血を引いているかなどの属性を抜きしたところで成立する「歴史の記録者」というものであった。沖縄戦や基地への関心から沖縄の新聞社に就職したわけではなかったというCは次のように語る。

C: それこそ、自分は親族に沖縄戦で亡くなった人はいないし、自分の部分の戦争体験の伝承と、お爺ちゃんが戦争に行ってたで、とか、それくらいしか聞いてないですし、お婆ちゃんとかもいろいろあったのかもしれませんが、戦争について自らの問題の意識や関与が非常に薄いなという感じ……それを負い目というのか、そういうのがないから話が聞けないわけではないとは思いますが……。……沖縄戦からむ、ま、当然、他人事でしかないし、他人だからこそ聞ける話もあるんですが、そこは、ずっと埋めがたい溝になるだろうと……。越えられないものとしてあるだろうなと……。沖縄の人間ではないということ……。それなりに沖縄戦の体験者の話は書けるでしょうが、もっと自分の悲しみとして、どこまで自分のものとなり得るのかという自信がないというか、そういうような感じを持って、はじめのころは、まあ、今もそういうのはちょっとあると

思うんですけど……。という前提があるなかで、自分はナイチャーとしてなにができるのかと考えたときに、いま、オスプレイの低周波のかなり響いてくる、あの嫌な感じとか、まさに自分の身体で、肌で感じていること、いま沖縄で起こっていること、歴史的な部分も含めて、ファクトとして押さえることは自分にはできる。そのときに当事者でなくても、できるのはそういうとなのかなと……。今、住んでる者として感じれることを素地としてやっていけるのではないかなと。それと基地を担当する形で、基地被害のファクトを記録して……。できることはそういうこととなのかなと、生きてきました。

Cがいう県外出身記者の役割は、沖縄に根を下ろし、沖縄の人と同じ空気を吸い、同じ水を飲み、同じ危険に慣る新住民の1人としての連帯感や義務感から導かれたもので、たんに事実報道をするという意味ではない。こうした見解は、他の被調査者の聞き取りからもうかがえた。

6.2. ヘイトの風よけ

他方、「よそ者」であることを強く意識したところから、みずからの役割を模索している人もいた。Aはある日、オスプレイ反対闘争に参加していた顔見知りの女性に近づいて、コメントを取るでもなく、なんとなく話しかけたとき、きっぱり拒絶された経験を語った。

A: ……そしたらその女性は「わたしたちはもう十分反対と言いました。本土の人が本土の人に取材して下さい」と言ったんですね。わたしが本土の人なので、本土の人は本土の人に聞きなさい。沖縄の人に聞くじゃなくて、これは本土の問題なので、本土出身であれば、本土をどうにかしろ、という意味だったと思います。

——Aさんとしては?

A: 分かりました、と、そのまま引き下がりました。

このほかAは、社内でも属性問題に直面したという。特定秘密保護法が国会で可決されようとしていたことをコラムで批判的に取り上げようとしたときのことをこう話す。

A：同僚の、ウチナンチュの記者にですね、「この法律は沖縄の将来にすごく影響がある」と。「基地に囲まれて、秘密だらけなので、沖縄の将来をすごく左右する法律で、こういう大切なときにはウチナンチュの記者が書くべきだ」と言われたんです。

——へー、切ない話ですね。

A：まあ、言う意味はわかりますよ。自分は沖縄にいるつもりですけど、いつ逃げるか分からんし、本土の人間が沖縄の将来に責任を持てるのか、と。そういう意味では、彼の言うことは、もっともなところもあって……。

A は自分の立ち位置について「アイデンティティは本土の人間で、お邪魔している『よそ者』なんです」「構造的に加害の側にいるのは間違いないし、抑圧していた側から来た人間というのは、動かしようのない事実なので」という。そのうえで、自分が見つけた一つの役割として「ヘイトの相手」を挙げた。

じっさい A は、作家の百田尚樹やヘイト団体からたびたび名指しで攻撃されている。ただし A は、「土人」などの罵詈雑言を浴びても「ぼくは属性を攻撃されていないし、傷つけられない。魂を傷つけられることではないので、そこを引き受けるのが自分の仕事だと。少なくともヘイトの相手は自分がやったらいいかなと思ってます」と語った。

6.3. ポジショナリティ

E は、ポストコロニアリズムの研究者が著した1冊の本と出会い、自分の立ち位置が定まったと話した。ポストコロニアリズム（ポストコロニアル理論）は、植民地支配から脱したはずの地域に旧弊や遺制が残されていることなどを批判的に問う学問潮流といっているだろう。E が出会ったのは沖縄出身の研究者野村浩也の『無意識の植民地主義』という本であった。

E は自分自身が、この本で批判されているような、すなわち「無意識」のうちに沖縄の味方を装うような「植民者」であったことを嫌と言うほど思い知らされたという。

E：俺は沖縄の味方なんだよなと新聞記者やってきた

んですよ。沖縄の奴らと、仲間と一緒にじゃないかと思ってやってたんだけど、そこんところは曖昧というか、考えないようにしてた[……]ヤマトンチュも何もないだろうって感じで、自分のなかに言い聞かせていた。けれども、沖縄出身の沖縄人の記者からみると、たぶん俺はある意味、立ち位置が違ってるっていうの、ずっと思ってたと思うんですね。で、そこ、俺のほうは、なんか、ぼやかして、「いいじゃないか、いいじゃないか」って感じでごまかしてやってたんですよ。

沖縄社会における本土出身者としての権力的な立場性（ポジショナリティ）を自覚した上で、自分には何ができるのかを考えなければならない、と E は強調する。E によれば、本土出身の彼は「植民者」にすぎない。

——本土の人が沖縄人に「同化」するのは困難なんでしょうか？

E：同化なんておこがましい、つつうか、ありえないと思いますね。むしろ、沖縄の人が同化しちゃうのは[……] そうしないと生きていけないんですから。でも、われわれは同化しなくても生きていけるんですよ、沖縄では。「支配者」だから。そこでウチナンチュになった気分にいる、つつうのは、傲慢だと思います、わたしは。

社会的弱者の味方として立ち振る舞っている人の中には、はからずも弱者を利用したり搾取したりしてしまうような人がある。E によれば、そういう人たちは往々にして、弱者の目から自分がどのように認識されているか、すなわちポジショナリティに無自覚な人であり、そんな人を嗅ぎ分け力が自分にはあると話す。

E：同じ植民者だから、すごくよくわかるんですよ。[……]「おまえ言ってるのは、すごくスケベでイヤらしいことを言ってるの、分かるよ」って。「おれも同じこと考えたことあるから」って。そこで、バーんってね、その矛盾を突いていくってことは、逆にできるんじゃないかなと思うんですよ、沖縄の人よりも。

本土との関係でアイデンティティの問題に直面

した経験を持つ沖縄の人と、沖縄との関係で自分のアイデンティティに疑いを持たずにいる本土の人間が会合するとき、両者の間に政治的権力的な関係が生じる。どのような人も、そうした関係から自由になれない。ジャーナリストは自分のことを「中立的な観察者」や「読者の味方」などと考えがちだが、すべての被取材者がそのように見てくれるわけではない。そのことをEは問題にしているのであろう。

おわりに

本調査を通じて何が確かめられ、いかなる知見が得られたといえるだろうか。

異なる人種、民族、文化、宗教が隣り合わせで共生する社会では、ジャーナリストの属性をめぐる調査や研究がなされている⁽²⁴⁾。だが、日本ではジャーナリズム研究の分野で、フェミニズムの議論と交差する女性記者に関する研究を除けば、取材者の属性に着目したものは少ない。それはジャーナリズムを掲げる日本企業が、報道においては形式的な客観性に固執し、人事面でも多様な人材を積極的に求めてこなかったことを反映しているといえるだろう。

すでに述べたとおり、復帰前の沖縄を訪れた本土の記者たちは、基地被害に苦しむ当事者でもあった記者の前に立ちすくんだ。沖縄における初のヤマト記者となった東京生まれ東京育ちの森口豁は、沖縄を離れる際に開かれた送別会で、痛烈な贖罪意識を感じたことを自著で吐露している⁽²⁵⁾。今回の調査対象者からも、森口と共通するような本土出身者としての罪の意識といえる言葉が聞かれた。紙幅の関係で本稿では触れられなかったが、D・Q・Sにおいてその傾向は顕著であった。Nに至っては、沖縄戦を生き延びたお年寄りから戦争体験を聞くときは、朝から飲まず食わずの状態取材に臨んでいると話した。

沖縄に生まれ育ち、地域の歴史を背負い、地元をより良くしようと新聞記者になったウチナーンチュには、彼ら彼女ら固有の使命感や責任感があることは想像できる。おそらくそれが「沖縄ジャーナリズム」の原点とされてきたものであろう。ただ、時代は移り変わり、こんにちの沖縄の新聞

社には、本土生まれ本土育ちのナイチャーの記者が増えてきた。琉球新報社で概算してもらったところ、全記者のうち県外出身者は5人に1人に達していた⁽²⁶⁾。沖縄タイムス社でもナイチャー記者は増加傾向にあるという。

もし「沖縄ジャーナリズム」を再定義するとすれば、その一部を本土出身者が担っていることは明らかである。彼ら彼女らは記者としての職業的アイデンティティのほか、沖縄県の新住民としての意識があり、ヤマトンチュ／ナイチャーとしての属性と、それゆえの立場性をめぐる葛藤などの複雑さを備えている。「文化の異なる複数の集団に属し、そのいずれにも完全には所属することができず、それぞれの集団の境界にいる人」⁽²⁷⁾をマージナルマンというが、そうした県外出身者のマージナリティが「沖縄ジャーナリズム」の規範や実践倫理を変容させ更新していることは明らかである。

最後に付け加えておきたいのは、本調査を企画するにあたり、筆者は林瑛香(2014)の手法をヒントにしたことを明かしておく。林は、日本の主流メディアで働く在日コリアンの記者たちを調査対象とし、在日コリアンたちが、客観的であろうとする報道倫理とマイノリティとして経験や特性を主体的に操作していたことを明らかにした。その調査は林が「はやし・えいか」であり同時にLim Younhyangでもあったために生まれたのではないかと筆者には思われた。林の例とはパラレルにはならないが、筆者も関西生まれ本土育ちの元新聞記者という属性を主体的に操作し、本調査を行ったことをあらためて明示しておく。

※本研究は龍谷大学研究員(2017年度短期国内)として実施した調査の成果である。

注

- (1) Said, E. W (1981) 参照。
- (2) 日本マス・コミュニケーション学会の旧名称。
- (3) 「戦後ジャーナリズム年表(〈特集〉ジャーナリズム論の再検討)」『新聞学評論』18巻、119-133頁、1969年
- (4) 掲載されたのは北海道から鹿児島までで、沖縄についての記述はない。

- (5) 県単位で発行されている地方紙とは異なり、市町村域で発行されている新聞紙。畑仲（2014）参照。
- (6) ニューヨーク・タイムズ紙によるペンタゴン・ペーパーズの報道（1971）とワシントン・ポスト紙によるウォーターゲート事件の報道（1972）。政府からの圧力に屈さなかった2紙の報道は調査報道の金字塔とされている。
- (7) 沖縄返還協定に関する機密文書を外務省職員から入手した毎日新聞の西山太吉記者が、国家公務員法違反で逮捕された事件。調査報道で政府と対峙したアメリカの2紙とは異なった展開となった。
- (8) 初報といえるのは1955年1月13日朝刊の「米軍の『沖縄民政』を衝く 米軍からの手紙で自由人権協会が調査」と題した記事で、翌14日には社説「沖縄民政について訴える」が掲載された。11月には朝日記者による探訪記「沖縄の顔」が5回連載された。
- (9) のちの沖縄県知事となる大田昌秀は当時、琉球大学社会学部の専任講師であった。沖縄戦では「鉄血勤皇隊」にいたことでも知られる。
- (10) 東京大学名誉教授（社会心理学）。
- (11) 本稿で参照した門奈（1996）の版元は雄山閣だが、初版本は1970年に現代ジャーナリズム出版会から刊行されている。門奈はその2年前に同志社大学院修士課程を修了したばかりで、アカデミックキャリアに就いておらず、小中学生向けの塾講師であった（朝日新聞「門奈直樹氏 著者と一時間」1970年2月10日）。
- (12) 新聞労連新聞研究部編（1970）参照。
- (13) 1993年に『新聞学評論』から改題された。
- (14) 2017年夏の面談時には音声録音と写真撮影の許諾を取った。2018年春の再訪時には、文字起こした文書の内容の確認をしてもらい、引用する了承を得た。
- (15) 中部地方には東海地方と北陸地域を含む。
- (16) ヤマトンチュとナイチャーは異なる概念である。現在の沖縄では本土出身者はナイチャーと呼ばれることが多い。
- (17) たとえば上野千鶴子は、沖縄に移り住んだ本土出身者に関するエッセーのなかで「何年いてもヨソモノはヨソモノ。[……] したたかに共同体の排他性を味わわれることだろう。都会からムラに移住した新住民はだれでも似たような経験をするが、オキナワではそれにヤマトに対する猜疑心が加わる。そして、その猜疑心には理由がある」と述べている（上野2001:22）。
- (18) 森口豁は東京生まれ東京育ち。玉川学園時代にウルトラマンの生みの親である金城哲夫に出会ったことなどが縁で、玉川大学を中退して琉球新報社の記者となった。日本テレビに移籍も沖縄に留まって多数のドキュメンタリーを本土に送り出した。沖縄に関する著作も多数ある。
- (19) 野里洋は石川県出身。琉球新報社で文化部記者として活躍し、常務取締役を最後に退任。同社役員で初の本土出身者であった。
- (20) 阿部岳（2017）は自著で東京出身であることや、沖縄社会における自らの立ち位置を明らかにしている。米軍基地で軍作業に就いた沖縄の人たちへの聞き取りの連載記事を書籍化した『基地で働く』（2013）でも、県外出身の記者が中心的な役割を担ったことが記されている。
- (21) 沖縄県立高校。読谷は「よみたん」と読む。
- (22) 琉球新報ウェブサイト「沖縄コンパクト事典」の「『沖縄の心』発言」によれば、西銘は1985年、朝日新聞の取材で「沖縄の心とは何か」と問われ「それはヤマトンチュ（大和人）になりたくて、なり切れない心だろう」と答えたという。ただし、「沖縄のこころ」という言葉は、本土復帰の年に大田昌秀が岩波書店から上梓した新書のタイトルでもあった。大田は同書で沖縄戦体験をもとに平和を求める信念を記している。
- (23) 2013年5月に琉球民族独立総合研究学会が設立された。
- (24) Rios, D. I. and Mohamed, A. N. (1999) ほか参照。
- (25) その光景を森口は「最後の送別会の終わりぎわに、大声をあげて泣いてしまったのは、自分がやっぱりヤマトんちゅ（ママ）でしかありえなかったことの悔しさと、ウチナーんちゅ（ママ）への心からの贖罪の意識からのことだ」と記している。（森口1987:92）
- (26) 普久原均編集局長に対するインタビュー（2017年9月8日、琉球新報社）による。ちなみに女性記者の比率は全記者の約3割であった。
- (27) 小学館『デジタル大辞泉』の語釈。

参考文献

- 阿部岳（2017）『ルポ沖縄 国家の暴力 現場記者が見た「高江165日」の真実』朝日新聞出版。
- 知念ウシ（2013）『シランフナー（知らんふり）の暴力』未来社。
- 畑仲哲雄（2014）『地域ジャーナリズム：コミュニテ

- イとメディアを結びなおす』勁草書房.
- 林瑛香 (2014) 「主流メディアにおけるマイノリティ・ジャーナリストの困難性：在日コリアン記者のインタビュー調査を通して」『マス・コミュニケーション研究』84 巻 151-168 頁.
- 門奈直樹 (1972) 「戦後沖縄ジャーナリズムの形成過程：民衆言論成立の一系譜として」『新聞学評論』21 巻 1-14 頁.
- (1995) 「戦後沖縄ジャーナリズムの自己形成：平和の自己認識を通して」『マス・コミュニケーション研究』47 巻 45-59 頁.
- (1996) 『アメリカ占領時代沖縄言論統制史：言論の自由への闘い』雄山閣出版.
- 森口豁 (1987) 『沖縄こころの軌跡』マルジュ社.
- 野村浩也 (2005) 『無意識の植民地主義：日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房.
- 沖縄タイムス中部支社編集部 (2013) 『基地で働く一軍作業員の戦後』沖縄タイムス社.
- 奥田道大 (1968) 「地域社会とマス・コミ」千葉雄次郎編『マス・コミュニケーション要論』有斐閣, 122-138.
- 大田昌秀 (1964) 「明治時代の沖縄の新聞－上－」『新聞研究』154 巻 61-65 頁.
- (1964) 「明治時代の沖縄の新聞－中－」『新聞研究』156 巻 66-70 頁.
- (1964) 「明治時代の沖縄の新聞－下－」『新聞研究』157 巻 55-610 頁.
- (1965) 「沖縄最初の新聞『琉球新報』：その創刊の頃を中心に」『新聞学評論』14 巻 53-69 頁.
- Said, E. W. (1981) *Covering Islam: How the Media and the Experts Determine How We See the Rest of the World*, Pantheon Books. (=1986 浅井信雄・佐藤成文訳『イスラム報道——ニュースはいかにつくられるか』みすず書房.)
- 新聞労連新聞研究部編 (1970) 『安保・沖縄報道：たたかう新聞記者たち』労働旬報社.
- 玉城真幸 (1970) 「基地のど真ん中での取材活動」『安保・沖縄報道：たたかう新聞記者たち』労働旬報社.
- (1970) 「民衆から逃がられぬ新聞記者－“嘉手納駐在記者”の記録」『朝日ジャーナル』朝日新聞社.
- 田村紀雄 (1968) 『日本のローカル新聞』現代ジャーナリズム出版会.
- Ríos, D. I. and Mohamed, A. N. eds. (2003) *Brown and Black Communication: Latino and African American Conflict and Convergence in Mass Media*, Praeger.
- 上野千鶴子 (2001) 「ヤマトンチュから見たオキナワ」上野はか著・天空企画編『沖縄の人生：南の島から日本を見る』光文社.